

三陸の海を放射能から守る 岩手の会

ミニコミ通信 第41号

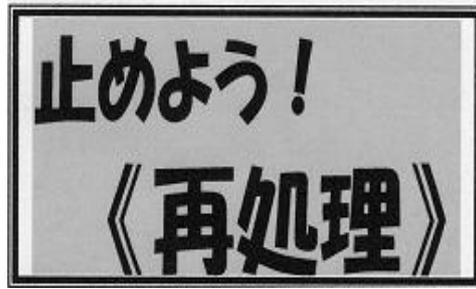
<http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm>

《岩手の環境／R1廃棄物／再処理》

*署名用紙はここにあります

http://briefcase.yahoo.co.jp/k_imag

《まった再処理分庫》



2007 (平成19) 年
8月14日
編集事務局 S.Oshida
TEL・FAX
019-623-1636
郵便振替
02240-5-102650

「六ヶ所再処理工場」に反対し放射能汚染を阻止する

全国ネット・キックオフ集会



七月二十八日、東京都内ドイツ文化会館において、再処理工場に反対し放射能汚染を阻止する全国ネットワークの結成集会が開催されました。日本消費者連盟、生協グリーンコープ連合、生協あいコープ宮城、生協連合会きらり、生活クラブ生協、大地を守る会の六団体（会員八十万人）の呼びかけにより全国から三〇二名の代表者が集まり再処理工場への「キックオフ宣言」がなされました。

日消連富山洋子会長は「放射能と命は共存出来ない。核燃サイクルは未来の命をも脅かす」と挨拶し、原子力資料情報室澤井正子さんは「再処理工場が廃棄する放射性物質の危険性」と題する講演を行いました。

岩手県重茂漁協組合長ら三県の生産者団体からも連帯の挨拶がなされました。

集会では、六ヶ所工場を監視し、操業を中止させるための「放射能測定」や「全国署名」に取り組むとする共同声明が採択されました。

地震に危ない再処理工場 澤井正子さん

講演で澤井正子さんは、東京電力のホームページは『柏崎刈羽原発は活断層の上には無い』と明記しているが、『今回それが間違っていることが証明された。』六ヶ所再処理工場の真下にも二本の断層が走っている。使用済み燃料貯蔵プールは常に電気で水を循環させて冷却しており、停電すると臨界、発熱事故の危険が高まる。再処理工場の農産物、海産物への影響について、青森県は、『放射能が一倍』になる作物』や『海藻などのプルトニウム』の検出』を予測値として発表しているが、こういうものを消費者は望むだろうか、と語りました。

日本一きれいな三陸の海を守る 重茂漁協組合長

重茂漁協の伊藤隆一組合長は、『私たちは原発も大型化学工場もない日本一きれいな海で育てたコンブやホタテを誇りを持って消費者に送り続けて来ました。きれいな海を絶対に守りぬきます。』と力強く挨拶しました。

自主的放射能測定で監視活動強化

結成集会では、本格稼働を阻止出来なかった場合も想定し自主的な監視活動を準備し、検査機器購入（四〇〇〇万円）のための基金づくりを行うことを決めました。放射能測定結果については、二段階に分けた「警戒基準値」を設定しそれに応じた行動を行います。

「警戒基準値Ⅱ」は六ヶ所工場が本格稼働した場合の青森県の予測値です。この数値より低い場合は、必要な場合のみ風評被害を防ぐための数値公表がなされます。

「警戒基準値Ⅰ」はチェルノブイリ事故の際の日本の輸入食品について設定された「セシウム濃度」基準に安全率を十倍かけた数値です。「セシウム濃度37ベクレル/kg」がその数値ですがその他の核種についても同等濃度を警戒基準値濃度とし設定します。この基準値を越えた場合、緊急アピールのみならず、生産物流通の可否の判断も行うこととします。

この測定活動を通じて、生産者と消費者が再処理工場がもたらす汚染の実態をしっかりと認識し、

食品放射能警戒基準値と アクションレベル			
放射能濃度	レベル	行動提案	測定結果
高い↑	警戒基準値 I 以上	緊急的なアピール 行動・生産物流通の 可否判断	詳細結果 を公表
	警戒基準値 II 以上	緊急的なアピール 行動・自主的測定の 強化	
	警戒基準値 II 以下	自主的測定を継続	風評被害を 防ぐ場合など 公表
*「警戒基準値 I」・チェルノブイリ事故の時の輸入食品暫定基準であった「セシウム濃度」370ベクレル/kgの、十分の1(安全率) = 37ベクレル/kg			
*「警戒基準値 II」・六ヶ所再処理工場が本格稼働したときを想定した青森県の予測値(影響が甘く見積もられているという批判が強い)			
低い↓			

情報を伝えあい、再処理工場の操業そのものをやめさせる力に変えてゆこうとするものです。

署名運動・メッセージカード作戦を展開

全国ネットワークの活動として総理大臣・経産大臣宛の署名運動が提起されました。一つは「安心して食べ続けたい」という消費者の立場からの署名、もう一つは重茂漁

協の提起した「海を放射能で汚さないで」という生産者の立場からのもので、セットで集めるつもりでした。メッセージカードの行政当局への送付も話しあわれました。

《情報》六月二八日放出
トリチウム廃液
原発基準の100九倍
(九三人の経口急性致死量に相当)

県議会請願 参考人 山名元京都大学教授
「居住境界外への放出なので住民の被曝は0.022ミリシーベルトで安全」と説明

岩手県議会環境福祉委員会は、「岩手の会」の請願判断のために参考人招致を決めました。次回九月四日は、京都大学小出裕章先生からの説明になります。

山名元教授の所論

八月七日、招致された京大原子炉実験所教授山名元氏は、再処理は必要であるとの立場から一時間半にわたって講演を行いました。その中で同氏は、自然にも放射能があり、六ヶ所工場から流されるトリチウムやクリプトンはそれに比べればわずかである、再処理工場の廃液はる過ぎたもので、沿岸沖合三ヶ所の海底四四の《居住境界外》に排出するので、海の水で薄められ、陸上の居住者への影響は厳密に計算しても0.022ミリシーベルト以下で安全であるなどとする所論を述べました。

委員からの質問

講演のあと三浦陽子委員から①内部被曝の心配②地震には大丈夫なのか③セラフィールド周辺の子どもの白血病死率増加などについて質問されました。教授は耐震については専門ではないとし、乳児の白血病死事故では明らかに影響があ

るが、セラフィールドでは因果関係は証明されていないと答えました。高橋博之委員から①中間貯蔵の方法はないのか②三ヶ所沖合では魚や海藻を通じた濃縮がなされるのではないのか③アメリカ科学アカデミーの報告では「放射能は低線量でも、発ガン性などリスクが大きい」と発表されているがどうかなどの質問がなされました。これに対して教授は、直接処分か、再処理しかないが、私は再処理が良いと思う。アメリカ科学アカデミーのしきい値はないということはその通りであるが、私も資料を検討したいと答えました。

傍聴者の感想

岩手の会から五人の会員が傍聴しました。主に次のような感想が出されました。◎トリチウムの昨年度の放出は四九四兆ベクレル。体に入りDNAや臓器構成水素原子と置き換わる危険がある。たった三ヶ所沖合い自然の濃度の約千四百万倍ものトリチウム液を年間六〇回も流してどうして影響がないなどと言えるのか◎六ヶ所村周辺の住民の被曝量「0.022ミリシーベルト」の根拠が示されていない

い。イギリス政府は有機結合型トリチウムの実効線係数を二倍にするべきだという公式見解を出した。係数がちよつと変わるだけでも大きく変わる被曝量を「0.022」と断定するそのやり方が既に非科学的だ。

◎除去装置をつけよという請願なのに、トリチウムの除去については触れられなかった。平成一五年運転を終了した新型転換炉「ふげん」にはトリチウム除去装置が設置されていることが分かっている。最新の技術を知りたい」などの批判がだされました。

「放射能を出すな。除去装置をつけよ」
八月二十日〜二十六日
全国一斉署名行動
《現在四万筆》

全国一斉行動が宮城県市民団体「地球とともに」の武藤北斗さんから提起され取り組まれます。岩手の会も八月二五日(土)十六時から盛岡市材木町で街頭署名を行います。

サーファーから

署名取り組みの連絡

各地のサーフィン愛好者から問い合わせが続いています。本年も日本各地の海岸でサーフィンイベントが開催されています。

2007年度	処理ウラン量		放出トリチウム	放出ヨウ素129	放出ヨウ素131	放出回数
	体数	(約)トン(U)	Bq	Bq	Bq	回
4月	44	20	30,000,000,000,000	14,000,000	2,500,000	7
5月	0	0	4,700,000,000,000			2
6月	0	0	74,000,000,000,000	820,000		8
累計	44	20	108,700,000,000,000	14,820,000	2,500,000	17
2006年度	508	140	497,700,170,000,000	94,240,000	3,100,000	60

すが、放射能が海に流されるのはとんでもないことであるとして、各地で学習や署名行動を行うという連絡が届いています。